

研究所だより

第 139 号

令和 7 年 7 月 18 日発行

可 見 市 教 育 委 員 会

可 見 市 教 育 研 究 所

可 見 市 広 見 1 丁 目 5 番 地

TEL(0574)63-4841

E-mail:kyoikukenkkyu@city.kani.lg.jp

安全で栄養バランスのとれたおいしい学校給食の提供と食育の推進

可 見 市 教 育 委 員 会 事 務 局 長 水 野 伸 治

学校給食を取り巻く環境は、近年大きく変化しています。

エネルギー価格や原材料費の高騰に伴い、電気代や燃料費が上昇し、食品価格も引き続き上昇しています。また、猛暑や豪雨といった異常気象が農作物に影響を及ぼし、食材の価格はさらに高騰しています。このため、学校給食の運営にも影響が出ており、限られた予算内で安全で安心な学校給食を提供することが難しくなっています。

こうした状況下で各自治体は、学校給食を継続して提供するため、給食費の値上げに踏み切るところもありますが、子育て世帯の経済的負担を軽減しようと、自己財源や地方創生臨時交付金、ふるさと納税などで財源を確保する自治体もあります。さらには、独自に給食費を無償化することで、子育て支援や少子化対策、定住促進を図る自治体もあります。本市においては、臨時交付金を活用しながら、学校給食における物価高騰分としてこれまで約1億7千万円を負担してきました。

また、学校給食における食育推進の重要性も高まっています。健全な食生活は、成長期にある子どもにとって健康な心身を育むために欠かせないものであり、将来の食習慣の形成にも大きな影響を及ぼすため、極めて重要とされています。さらに、食を通じた地域への理解や、失われつつある食文化の継承、正しい基礎知識に基づき自ら判断して食生活をコントロールすることも必要となっています。

市では、栄養教諭が中心となって食育の推進に取り組んでいます。献立には旬の食材を取り入れ、郷土料理や行事食の提供、地場産物を使った献立『がんばれかにつこ！給食』の提供、さらにはセレクト給食やふれあい給食などを実施しています。市内全小中学校では発達段階に応じた食に関する授業を行い、給食時間の放送を通じて食文化や地場産物、栄養など食に関する指導も行っています。また、PTA や家庭教育学級を対象に、保護者にも食の指導を実施しています。

経験したことのない食材価格の高騰により、栄養教諭・学校栄養職員は献立を作成するにあたり、大変苦慮している様子を間近で見してきました。例えば、鶏もも肉を鶏むね肉に変えたり、肉や魚にポテト、高野豆腐などを混ぜて量を調整したりと、価格を抑えつつも栄養価をできる限り損なわず、満足感や満腹感を得られるようにさまざまな工夫を凝らして、魅力的でおいしい給食を提供してくれていました。

国は令和 8 年度に学校給食の無償化を実現するとしています。子育てを担う世代の経済的負担を軽減することは必要ですが、学校給食が無償化されることで、食に対する意識や、学校給食に関わる人々への感謝の気持ちが失われないことを願っています。



可児市「教育支援センターの現状」

「一步を引き出すのは、ただただ話を聴くこと」



「こんな素敵で楽しい世界があるなんて知りませんでした。」

「あきらめずに何度も来てくれて、ありがとうございました。」

この言葉は、30 回を超える家庭訪問の末、ようやく教育支援センターの扉を開いた生徒とその保護者が、つながりサポーターに向けてこぼしたひと言でした。

「最初の訪問は、玄関先でのほんの数分。扉越しに聞こえる小さな返事に耳を澄ませながら、ただ『また来ますね』と笑顔で伝えることしかできませんでした。それでも足を運ぶことをやめなかったのは、目の前にいるその生徒に『この思いを届けたい』と願ったからでした。学校という場所が、ある日突然『行けない場所』に変わってしまったその理由も、気持ちも、心に押し込めて…。そんな孤独の中で、この生徒はどれほどの時間を過ごしてきたのだろう。そう思うたびに、『待っている人がいるよ』『外の世界はすばらしいよ』ということを伝えなかったのです。」

そう語ったのは、教育支援センターのつながりサポーター。

長期欠席の児童生徒の中には、家族以外と会話がないう状況や、家族とも会話が途絶えている状況もあります。つながりサポーターは、何度も家庭に足を運び、根気強く対話を重ねようとしますが、時には、保護者からも歓迎されない言葉を聞くこともあります。そんな状況を経て、やがて教育支援センターに足を運ぶようになった生徒とその保護者から、冒頭のような言葉を聞けることは、想像すらしていなかったことでしょう。そして驚くことに、このようなケースの児童生徒で、教育支援センターにつながった数は、予想を遥かに上回る数にのぼっています。どのようにすると、心を開いてもらえるのでしょうか。その秘訣を聞きたくて、私はつながりサポーターに会うたびに、根ほり葉ほり聞き出していました。つながりサポーターから聞いて分かったことは、「一步を引き出すのは、た

だただ話を聴く」ということ。一人ひとりのペースに寄り添い、決して焦らず、諦めずに関わり続ける姿勢が児童生徒の心を揺り動かすというのです。そう語るつながりサポーターは、児童生徒の人生の中で、最も成長できる小中学生の時期に関わる教育者としての誇りをもっているように感じました。

学校では、登校している児童生徒たちを見ていると、つい「目の前」にばかり意識が向いてしまいがちです。でも、同じように学びたい気持ちがありながら、さまざまな理由で教室に足を運べない児童生徒たちがいます。それぞれの深い思いとその声に静かに耳を傾け、無理に引き戻すのではなく、「ここに居てもいい。」と思える場を広げていくこと、いつでも学級に迎え入れることができるように、「ここもあなたの居場所だよ。」という受け入れる体制をつくるのがサポートの第一歩かと思います。「学校は、すべての児童生徒にとって安心できる場所であってほしい。」そんな願いを胸に、見えづらいところにいる児童生徒にも、目を向け続けなければと思います。

小中学校では、児童生徒の数年間だけを預かっているのではなく、その先に続く長い人生の土台を築く役割を担っています。学校生活での成長だけでなく、10年後、20年後、社会の中で自分らしく生きる姿を思い描きながら、一人ひとりと向き合いたいです。目の前の困りごとは、未来の力につながる大切な一步。人生をトータルで見据え、未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」を育む教育実践を積み重ねていきたいです。



(教育委員会 教育研究所 石黒 智子)

可児市「いのちの教育」

「いのちの教育」の大切さ ～ありのままの自分を尊重する～



「いのちの教育」と聞いて、何を思い浮かべますか？保健体育、理科、道徳、学活、様々な場面が想起されます。「いのちの教育」とは何をどのように伝える教育でしょうか。

可児市の教育の根底は「子どもの命を守る」。今年度から、可児市学校教育指導の方針と重点に「一人ひとりが自身の命を見つめ、ありのままの自分を尊重し、自信をもって生活できるよう支える」という言葉が加わりました。「いのちの教育」は、子どもたちが自身の命や生き方を見つめ、自己肯定感を培う上で極めて重要な役割を担っていると考えます。

可児市では岐阜医療科学大学と連携し、助産師による「いのちの授業」を実施しています。内容は、第二次性徴期の心と体について、生命誕生について、命の繋がりについて、多様な性について、プライバシーについて、など学年や希望に応じて学校と相談して決めます。昨年度の授業では、精子が卵子に出会う確率は3億分の1の奇跡だと知り、受精卵の大きさ(針で空けた穴)を見つめる



ところから始まりました。小さな小さな命の始まりを感じ、胎児の成長を学びます。いざ生まれる時には、狭い産道を通るために頭や体の向きを変えながら、何時間もかけて自分の力で生まれてくるのです。家族は赤ちゃんがお腹の中にいる時から無事に生まれてくることを願い、誕生を迎えます。今ここに一人ひ



とは誰もが生きる力をもち、深い愛情で望まれて生まれてきたことを知ります。赤ちゃん人形をそっと包み込むように抱く子どもたちの姿からは、「いのちの授業」が単なる知識の伝達に留まらず、命の尊さ

を実感する時間になったことが伝わってきました。それは、自身の存在価値を見つめる自己肯定感そのものであり、同時に他者の命や生き方を尊重する人権感覚につながるものです。感想を一部紹介します。

- ・命について今まで考えたことがなかったから、とてもおどろきました。命の重みを感じました。
- ・「生きているだけで100点満点」という言葉を聞いて、すごく感動しました。生きている中で「これが普通」とか「これができて当たり前」という言われることがあるので、すごくうれしいような、温かい気持ちになりました。
- ・自分と周りを比べてしまうことがよくあるけれど、自分をまるごと大切にする、相手思いやることを大切にして過ごしていきたいと思いました。

「性」は「心が生きる」と書きます。誰もがどう自分らしく生きるかを考えるのが「性教育」です。「いのちの教育」は特別な授業だけのものではありません。日々の学校生活の中で、私達教員が子どもたちにどんな言葉をかけ、どんなまなざしを向けているかが根底にあります。日々の生活においては、さらなる成長を願い目標に向かって「もっと～すべき」と課題を指摘することも少なくありません。その前提として、「あなたはあなたでいい」というメッセージが十分に伝わっていることが大切です。

「〇〇さんの挨拶にいつも元気をもらえるよ。」「〇〇君の声かけのおかげで△△さんも最後までやりきれたよ。」当たり前に見える一つ一つを丁寧に言葉にして伝えることが、子どもたちの心に深く影響を与えます。自分のことを認め受け入れてくれる人がいる安心感は、大人でも同じではないでしょうか。いのちに向き合うということは「あなたを大切に思う」と伝えること。自分も他者も大切にできる心の育成が「子どもの命を守る」ことにつながるのです。

(教育委員会 教育研究所 脇田 知里)

可児市「ふるさと教育」

未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」を育む、ふるさと教育



■ふるさと教育

第3期可児市教育振興基本計画 目標4「ふるさとを愛し、社会に進んで貢献できる人を育てます」を目指し、ふるさと教育を推進しています。市内各小中学校では、特色ある教育活動の中で、地域の人材や教材を活用した体験的な学びが実施されています。

■市長による授業

令和6年度から「市長による授業」が再開され、市内小中学校12校で実施しました。小学校では、総合的な学習の時間に「可児市のじまんとほこり」の冊子を使い、市長から可児市の歴史や産業などを学びました。可児市がかつて湖であったこと、名前の由来、ものづくりなどについて、映像や実物に触れながら学びました。市長が直接授業をしてくださり、子どもたちの素朴な疑問にも丁寧に答えていただくことで、可児市の魅力や誇り、そして愛着を育む貴重な時間となりました。



蘇南中学校では、総合的な学習の時間を通して、「可児市の未来デザインを考えよう」をテーマに探究した市の未来について、代表者が発表しました。市長の感想を交えた講話や交流を通して、生徒たちは自分の考えをさらに深めました。参加した生徒からは「私たちが考えた案に、実現の可能性があることが分かり嬉しかった。市長の話から、企業と市の連携の重要性を学んだ。」という声がありました。

市長の「子どもたちに可児市の魅力、暮らしやすさ、働きやすさを伝えたい」という思いが

伝わり、授業を通して子どもたちの学びが深まってきました。

■市議会による出前授業

令和7年度から「可児市議会による出前授業」が始まり、6月には今渡南小学校6年生の社会・公民の内容に合わせて出前授業が行われました。澤野議長、高木副議長が講師となり、政治や議会の役割や仕事内容について、プレゼンテーションや、クイズで分かりやすく説明されました。「市長からのタブレット端末更新の提案に対し、議会では値段や故障したときの対応などを議論し、承認した」といった具体的な例を挙げながら解説しました。子どもたちからは「教科書に載っていない可児市議会のことが学べてよかった。」と感想があり、社会の学習内容と実際の可児市議会の役割や様子を結びつけながら学べる、貴重な機会となりました。



■未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」

ふるさとの人や自然との関わりから、地域の魅力や課題を知るといった探究的な学習に主体的・協働的に取り組むことで、ふるさとへの誇りと愛着が育まれていきます。「ふるさと教育」の推進は、未来への笑顔につながる「笑顔の“もと”」の育成であり、子どもたちが将来、「可児市に住み続けたい」と思う希望へとつながっていくと感じています。

(教育委員会 教育研究所 神谷 智之)



転入者の声

本質＝素敵な先生

可児市立中部中学校 教頭 長芝 真次



- ・(学校関係における) 白川町のよさ (○) と課題 (●) (独断と偏見)

- 少人数のため、手厚い教育がなされている。
(特に特別支援教育、教育相談関係)
- 自然が豊かで伝統や文化も多く、特色ある教育を進めやすい。
- 少人数のため、他からの学びが弱くなってしまう。(より多くの考えに触れたり、多様な活動をしたりすることが難しい)
- 町外の職員が少なくなく、通勤に時間や労力がかかる。職員の異動のサイクルが早い。

- ・(学校関係における) 可児市のよさ (○) と課題 (●) (独断と偏見)

- 児童生徒数、職員数が多く、活気がある。
- 時勢や実態に合わせた教育がスピード感よく行われている。(ICT、不登校対策など)
- 集団に埋もれて、力を発揮できなかったり、隠してしまったりする子もいる。
- 多様化ゆえに、物事を変えたり、新たなものをつくったりする際に配慮がいる。時間がかかる。

- ・(学校関係における) 可児市でも白川町でもどの市町村でも大切にしたいこと (独断と偏見)

- ・本質を見据えて、本質を基に進める。
- ・一人一人を大切にする。
- ・コミュニケーション力(人間関係力)を高める。

外から中を見ると、新たな発見があります。可児市外の勤務で、視野を広くすることや客観視、「本質」の大切さに改めて気づくことができました。

でも、一番お伝えしたいことは、可児市も白川町も(どこの市町村も)、素敵な先生ばかりだということです。とても勉強になります。少しでも追いつけるようにがんばりたいと思います。

大変な時こそ、自分が 「大」きく「変」われる時！

可児市立土田小学校 教諭 吉村 海人



4年ぶりに可児市に戻り、緑豊かな鳩吹山と、木曽川のせせらぎを間近に感じることができる土田小学校で過ごした3か月。しかし、ここまでの日々は、そんな風光明媚な景観に趣を感じる余裕もなく、毎日が逃げるようにして去っていくような感覚を覚えました。本当に、「大変」な日々の連続であったと実感しています。

初めての学校、初めての iPad への移行、初めての学年主任……。今振り返ると、新しい環境や役割に慣れることに手一杯で、いつの間にか、自分自身の心から余裕がなくなっていたのかもしれない。新しいことに挑戦する難しさと、なかなか上手くいかない歯がゆさを、肌で感じました。そんな時、以前に学年を組ませていただいた学年主任さんが、私に掛けてくださった言葉を不意に思い出しました。

『『大変』な時こそ、自分が『大』きく『変』わることができるチャンスなんだ。新しいことに挑戦して、上達するための努力をしなければ、失敗の悔しさや悲しさを味わうことはできない。今は、あなたにとっての転換期なのかもしれないよ。踏ん張ってここを乗り越えれば、きっと新しい自分に出会うことができる。一緒に頑張ろう。』

この言葉が、私の心の奥深くまで突き刺さりました。今は苦しくても、乗り越えるための努力を惜しまなければ、教師として、一人の人間として、さらに成長できるかもしれない。そう考えると、前回の授業では挙手ができなかったけれど、今日の授業で挙手をしているあの子は、勇気を振り絞って、今までの自分を超越しようとしているのかもしれない。外国籍のあの子は、母国語が使える環境ならもっと活躍できるのに、その悔しさを押し殺して、毎日必死に学習に励んでいるのかもしれない。だから、自分も頑張らなければ。

いつしか、ネガティブだった私の気持ちが、ポジティブな考え方に変化してきました。大変な日々が続いたとしても、同僚の先生方や子どもたちが、常に私を支えてくれています。そんな日常に幸せを感じながら、これからも、可児市の子どもたちのために尽力していきます。



令和7年度 教育実践論文募集



今年度も教育実践論文を募集します。

昭和58年度から始まった教育実践論文の募集も今年度で42回目となります。

日頃、可児市教職員の皆様が子どもたちの成長を願い、日々努力され、教育活動に創意工夫を凝らされているご実践を論文としてまとめてみませんか。

積極的なご応募をお待ちしております。参考に、昨年度の領域別応募数・入賞者を掲載します。

1 令和6年度実践論文応募状況

領域別	数	領域別	数
教科	15	学級経営	1
道徳	0	生徒指導	1
特別活動	1	健康安全	2
特別支援教育	3	管理経営	2

2 令和6年度実践論文審査結果

職名・所属名は、令和6年度時点です。

☆ 優秀賞

樋口 忠司	教諭	西可児中学校
濱田 奈美	教諭	蘇南中学校
渡邊 卓実	教諭	西可児中学校 (共同執筆)
青木 裕介	教諭	
田部井 由博	教諭	
曾我 昂平	教諭	
西原 裕貴	教諭	広見小学校
		西可児中学校

☆ 優良賞 (学番順)

桑原 秀弥	教諭	東明小学校
平野 靖之	教諭	蘇南中学校
加藤 祐輝	教諭	蘇南中学校
青山 岳史	教諭	蘇南中学校
井口 大輝	教諭	西可児中学校
村上 明子	教諭	西可児中学校
岩瀬 勇人	教諭	西可児中学校

☆ 奨励賞 13名



<募集要項>

(1) 目的

可児市の学校教育課題の克服をめざした小学校、中学校の教職員の創意ある実践研究を広く募集し、もって実践意欲の喚起と指導力の向上を図る。

(2) 内容

- ① 小学校、中学校の児童、生徒の指導および管理・運営に関する実践研究であるもの
- ② 問題意識が明白で、仮説・実践・検証の過程が具体的かつ累積的で、一貫性のある実践研究であるもの
- ③ 他の公の機関に発表していないもの

(3) 執筆要領 (要綱は、次の通りです)

- ① 使用言語 現代仮名遣いで書かれた日本語
- ② 使用ソフト ワード
(様式は岐阜大学教育学部同窓会HPからダウンロード可能)
- ③ 本文の形式
A4版6ページ(22字程度×43行～50行×2段 横書き) 余白上下左右各2.5mm程度)
・1ページ目の冒頭に研究主題・(副主題)・所属・職名・氏名を記載する(46文字程度×5行以内×1段)。上下に二重罫線を引く。
・1ページ目に「概要」(46字程度×10行)を記載する。(入賞者についてはこの「概要」をそのまま論文集に掲載)
・MS明朝(見出しは、MSゴシック)
- ④ 写真・図・表の使用
・図と表は、内容が読み取れる程度の縮小に留める。
・図と表は必ず区別し、図1・表1からそれぞれで通し番号や内容を簡潔に表現した見出しを論文全体にわたってつける。
- ⑤ 参考資料
本編以外の資料は添付しない。
- ⑥ 参考文献等
参考文献等がある場合は、論文の最後に年代順に一括掲載する。
- ⑦ その他
写真等は児童生徒が特定されないように留意する。

※詳しくは「岐阜大学教育学部同窓会HP」参照

(4) 提出先 可児市教育研究所

(5) 提出期限 令和8年1月9日(金) 正午

※ 詳細は、各校に送付しました「令和7年度 教育実践論文募集要項」をご確認ください。